長洲町立長洲小学校　校長便り　No.99

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和5年6月15日(木)

先ずは足元から

日頃心掛けていること。自己満足とは思うのですが、私はできるだけ履物を揃えるようにしています。学生時代の部活の影響で、必ず並べるという癖が付いたのですが、その時、部活でお世話になった方がこう仰っていました。

「履物を揃えるということは、心を整えるということと同じだ。」

この考え方は、「一事が万事」という考え方に繋がっていきます。靴も並べられないような人は、全てにおいて「整える」ということはできないということです。私は自分の言動をきちんと律することができているかという問いには、胸を張って「できている。」とは答えられませんので、できるだけそれに近づこうと、努力をしている最中です。自分をきちんと整えるということは、先ずは自分の身近な所から整えていくことが重要だと感じていて、靴を並べる、時間を守る、期限を守る等々、できることから始めているところです。自己満足ですが、その姿を神様が見ているんです。

《雑感》「積み重ね」

お世話になった先生のお話の中に次のような一節がありました。ご紹介します。

「朝、通勤していると黄色い帽子をかぶり、大きなランドセルで元気に歩く小学校一年生の姿を見かける。雨の日には、これに加え傘をさすこととなる。毎日の登下校には、子供たちの生きる力を育てる要素がたくさん含まれている。体力の向上はもちろん、暑さ寒さに耐える忍耐力、交通事故から身を守る危険予測・回避能力、自然を感じる力、地域の方に挨拶したり、友だちと話をしたりするコミュニケーション力。これから、梅雨や暑い季節を迎える。子供たちの安全や健康を見守りながら、地域・家庭と連携してどのように取り組んでいくか学校の腕の見せ所である。授業日数は一年間で２００日、９年間で１８００日。スタートラインに立った子供たちに、世界に羽ばたく力をつけさせる時間と方法は十分にある。」

私は小中学生時代の登校は基本的に徒歩でした。往復3．2㎞の道のりを月曜から土曜まで歩いていました。1年生の頃、途中にあった小さな水路が雨で増水していた時も、高学年のお兄さんやお姉さんと手を繋いで歩くこともありました。その様な経験の中で「生きる力」を身に付けていったと感じます。1日3．2㎞、これを200日継続したとして、640㎞、これを6年続けると3840㎞歩くことになります。毎日車で送り迎えの場合と前者では、心身ともに圧倒的な差が出るのは自明ですね。

最近は物騒な世の中ですから、一概に自動車による送迎がダメだとは言えません。しかし、危険予測・回避能力をご家庭で話題にして頂くだけでも、児童の意識は変わります。何らかの手立てによって、徒歩による登下校は可能になると思います。

梅雨のこの時期、傘をさして登下校することが多いですが、私は息子達に対して、「雨の中の自転車登校は自分を磨く良いチャンスだ。」と言い聞かせてきました。モチベーションアップのために、少々高めの自転車を買い与えてしまいましたが…。

シリーズ「自分を語る」#99

水俣での学びでは、多くの研修員がその取組に感嘆していました。自国の環境問題への取組に活かすことができると、口々に意欲を語っていました。ゴミの分別、3R（リデュース、リユース、リサイクル）について取り組んでくれることでしょう。

さて、次は長崎への修学旅行です。修学旅行と言っても名目は視察研修ですが…。視察先は、平和祈念公園、原爆資料館、大浦天主堂、グラバー園、佐賀県立宇宙科学館です。これを1日で私の自家用車で巡ることになりました。メインは原爆資料館です。朝5時30分、大江の宿舎に集合して出発。留学生は他の研修と重なっていたため、研修員とスペイン語の通訳、私の8名で出発です。熊本市を出発して、一路長洲港へ。通常2日の行程を1日で実施するのですから、移動中、食事もトイレも全てコンビニでした。コンビニでは、やんちゃな若者のように駐車場で「う○こ座り」にて食事を摂りました。研修員達は、何故か口々に「これも日本の思い出」と言ってニコニコでした。中国の研修員は「あぐら」が上手でしたね、国によって地べたに座ることにも違いがあるのが面白かったです。

フェリーに乗り換え、先ず向かったのは平和祈念公園です。平和祈念公園では諸外国の観光客との交流も行いました。更に、自国から贈られた平和を祈念するモニュメントを探しては、大喜びしていました。そこから徒歩で原爆資料館へ向かいます。私は原爆資料館の展示内容が今日の最大の学びとなると予想していました。

原爆資料館に入り、研修員の顔色はそれまでの観光ムードから一変、真剣な表情に変わりました。全てに英語、韓国語、中国語表示があり、更には、他の国向けのパンフレットまで準備されていますので。我々が伝えたいことをエッセンスとしてまとめられています。6名の研修員にしっかり伝わっていました。見学後、原爆資料館から出てきた研修員は、一様に少し疲れた、いや疲れたというより問題を直視し、真剣に思考しているという表情でした。後の研修報告には、すべての研修員が長崎での学びに触れていました。ペルーの研修員はこのように述べています。

「色々な写真やビデオを見て、とても悲しく涙が出てきました。今でも忘れることができません。二度とこのような悲しい出来事が起きてはいけない、次の世代のために核のない平和な世界を作らなければならないと感じました。」

他の研修員も同じように研修記録に記していました。世界各国、どのような人も平和を望んでいます。私自身、国際課で仕事をさせて頂きながら、個人レベルではこんなにも仲良くでき、その後も交流が続いているにも拘らず、国家間では何故問題ばかり起こるのでしょうか？　不思議でなりません。当時の私のメモ帳にはこう書いてありました。

「長崎視察終了。楽しかった。自分の車に世界7か国の人が乗っていた。考えると不思議だ。俺には海外経験が無いが、今やっていることが国際交流なのかなと思う。国際人としての感覚は互いのリスペクトだと思う。」

長崎視察研修は12月の出来事でした。すでに研修員の帰国に向けての手続きに入っています。今度は彼らを送り返すために、事務手続きが必要になってきます。これにも一手間ですが、研修員の呼び寄せに比べれば大したことはありません。粛々と行う事務手続きに、何か淋しさを感じる澤田でした。　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）